

Title	ビルマ語における数の範疇について：複数助詞の用法を中心に
Author(s)	藪, 司郎
Citation	東南アジア研究 (1970), 7(4): 504-526
Issue Date	1970-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/55601
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

ビルマ語における数の範疇について

—— 複数助詞の用法を中心に ——

藪 司 郎*

On the Category of Number in the Burmese Language

by

Shiro YABU

In Burmese grammar it is an interesting and valuable matter to study what category of Number exists in the language. Most of traditional grammarians of Burmese had undoubtedly explained that there would be two classes in the category of Number — one is singular, the other is plural. By efforts of modern students, however, it turned out clear that the analysis is hardly suitable. The present writer independently tried to investigate the matter through all the materials which are gathered on the basis of modern Burmese. Consequently it led to the following opinion.

In Burmese the plurality is specified by using each plural particle. Each noun and verb without plural particle cannot exclusively be singular, but may be either singular or plural. In other word plural particles are optionally used. This fact represents evidence that the rigid opposition of Number does not exist in Burmese nouns and verbs. Nevertheless as for personal pronouns [singular forms are strictly distinguished from plural forms with plural particles, that is, the use of plural particles is obligatory.

Noun plural particles in Burmese have three functions : (1) $A_{pl.} \rightarrow Aa + Ab + \dots$ (normal plural), (2) $A_{pl.} \rightarrow A + \text{others}$ (plural of approximation), (3) $(A + B + \dots)_{pl.} \rightarrow A + B + \dots$ (unification). (The symbols 'A, B, ...', 'pl.' indicate each noun and plural particle respectively.) Verb plural particles specify the plurality (more strictly, severality or mutuality) of agent.

The writer would like to express his special appreciation to Dr. Tatsuo Nishida, Kyoto University, who provided a kind and detailed criticism for this dissertation.

は じ め に

動機や目的や方法はさまざまであるけれども、古来幾多の人々によってビルマ語文法が書かれてきた。それらはそれぞれひとつの成果であり、またビルマ語学研究史における貴重な資料

* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

である。しかし大部分は、その記述や説明において、パーリ語ないしはヨーロッパの諸言語に行なわれている伝統的な規範文法の枠をあまりに転用しすぎているきらいがある。個別的言語の文法を書く場合、その言語の全体の構造に適合した枠を設定するのが自然であるとする。したがって、ビルマ語の場合もビルマ語という言葉にふさわしい枠があるはずである。

ビルマ語文法の枠を設定しようという目標のもとに、本稿では、その一斑としてビルマ語における数¹⁾の範疇について考察する。はたして従来の文法家たちの設定してきた単数・複数の対立が、ビルマ語に文法範疇として存在するのか、という点を懐疑的にみてゆきたい。論を進めるにあたっては、ビルマ語における複数助詞の用例を素材とする。²⁾

- 1) 本稿では、文法範疇としての「数」と概念上の「数」とを区別するため、前者を「数」、後者を「カズ」と書く。「数」は常にスウと読むものとする。五島忠久「数と性」(英文法シリーズ7, 研究社)参照。
- 2) 使用した資料は次のとおりである。あわせて、わかっている範囲内で、資料提供者の略歴を示す。なお本稿でいう「ビルマ語」とは、「ラングーンおよびマンダレイ方言を基盤とした、ほぼビルマ連邦全域にわたって共通語として使われている現代ビルマ語」を指す。

A) 小説

- (1) Daw Ni Ni Yin/do ni-ni-yin/ || mou: mye'yei hpyain ||

(ドー・ニーニーイン「雨のごとく涙あふる」) 30ページ (A 1)

1924年生。ラングーン在住。閨秀作家。この小説は *Thwethauk* (トゥエイタウ) 誌1965年11月号所収のもの。

B) 手紙

- (1) U Maung Maung Tin/qu: maun-maun-tin/(ウー・マウンマウンティン) 13通 (B 1)

マンダレイ(上ビルマ)在住。元マンダレイ文理科大学 (Arts and Science University, Mandalay) 講師。現在、ビルマ史委員会 (Burma Historical Commission) 文化評議会顧問。ビルマ文学者。

- (2) Daw Khin Latt/do hkin-la'/(ドー・キンラ) 15通 (B 2)

ラングーン在住。ビルマの3大総合月刊雑誌の一つ「トゥエイタウ」(仲間)の編集次長。閨秀作家

- (3) Ludu U Hla/lu-du. qu: hla./(ルードウ・ウー・ラ) 1通 (B 3)

マンダレイ在住。元「ルードウ」(民衆)新聞(1967年7月発刊停止)編集長。文筆家。

- (4) Ko Soe Maung/kou sou:maun/(コウ・ソウマウン) 10通 (B 4)

シャン州南部インレイ地方出身。ラングーン教育大学 (Institute of Education, Rangoon) 学生。インダー方言 (Intha dialect) の native speaker。共通語とインダー方言の bilingualist。言語学徒。

C) 会話

- (1) Ko Tint Naing/kou tin.nain/(コウ・ティンナイン) (C 1)

1943年ラングーン生。ラングーン工科大学 (Institute of Engineering, Rangoon) 卒。Sino-Burmese。

- (2) Ko Kyaw Min/kou co-min/(コウ・チャーミン) (C 2)

1943年ザガイン(上ビルマ)生。マンダレイ文理科大学卒。作家 Sagain U Po Thin (ザガイン・ウー・ポウティン) の孫。

- (3) U Ohn Kyaw/qu: qoun:co/(ウー・オウンチャウ) (C 3)

1933年プローム県(下ビルマ)生。マンダレイ農科大学 (Institute of Agriculture, Mandalay) 卒。農林省勤務。Shan-Burmese。

- (4) U Htun Hla/qu: htun:hla/(ウー・トゥンラ) (C 4)

1936年チャーボウン県(下ビルマ・デルタ地帯)生。マンダレイ農科大学卒。農林省勤務。

- (5) U Maung Maung Soe Tint/qu: maun-maun-sou:tin/(ウー・マウンマウンソウティン) (C 5)

ラングーン県視学官。Ko Kyaw Min の叔父。

- (6) U Nyunt Shein/qu: nyun.hyein/(ウー・ニョントシェイン) (C 6)

ビルマ放送局 (Burma Broadcasting Service) アナウンサー。一時NHK国際局の招聘ビルマ語アナウンサー。Shan。

- (7) U Maung Maung Tin (ウー・マウンマウンティン) (C 7) (B 1) と同一人物

C) の会話については、(1)(2)はおのおの筆者との対談(1967年3月録音)、(3)(4)は筆者をまじえた鼎談(1966年11月録音)、(5)(6)はNHK国際局ビルマ語放送のインタビュー番組(1966年11月録音)、(7)はビルマに留学した大阪外国語大学ビルマ語学科の一学生との対談(1964年録音)より得たものである。(つづく)

I ビルマ語文法における品詞分類の発展

1. ビルマ語における数の範疇という問題を扱うにあたり、まず、従来ビルマ語文法全般がどのような視点にたって扱われてきたかを、品詞分類を例にとり、一望してみたい。

2. 従来品詞分類は、単語の意義・機能・形態などに基準をおいて行なわれている。何に基準をおくかについて一貫性がないためしばしば非論理的という非難をうけてきた。それにもかかわらず、従来の品詞分類が現在でもなお広く用いられているのは、それに代わるべき明解なものがないことと、非難されながらも従来のものには捨てがたい軽便さがあることによるのかもしれない。しかしビルマ語に関していうならば、印欧語において行なわれているような品詞分類は全く意味がない。むしろこの言語の姿を著しくゆがめてとらえているとさえいえる。

3. いままで公にされたビルマ語文法のうち代表的なものについて見てみよう。

古典的著作のひとつである Judson (ジャドソン) の文法³⁾は、ビルマ語を印欧語文法の枠におしこんだものにすぎない。用例もすくなく、緬英辞典編纂における輝かしい業績に比べれば、この文法書はいささか平凡な感じがする。Lonsdale (ロンズデイル) の文法⁴⁾は、非常な労作でありビルマ語規範文法の最高峰である。したがって品詞分類をみても、彼が印欧語規範文法の枠をビルマ語に忠実に適用しようと、いかに努力したかがわかる。彼は序文のなかで、科学としてのビルマ語文法の必要性を説き、特に土着の研究者がパーリ語文法の枠を通してしかビルマ語を観察しなかったことを非難しているけれども、一方この著作においては学徒の便宜を考えて彼らに最もなじみの深い英語文法の流儀に従ったことを白状している。この文法の価値は以上の点を別にすれば、記述の綿密さにあるとあってよい。Bridges (ブリッジズ) の文法⁵⁾は、Judson, Lonsdale, Taw Sein Ko (後述) の文法の抄録が中心をなしていて、文法記

(脚注2つづき)

以上の資料は共通語としてのビルマ語の分析にほぼ適したものであると思われる。資料提供者のなかには人種的にビルマ人と認めがたい者がいるとしても、この場合それは問題とならない。彼らの母語がビルマ語であるか、あるいは彼がほぼ完全なまでの bilingualist であれば、資料提供者としての適格条件を欠くとはいえない。C) の(1)および(8)はシナ語やシャン語を知らず、ビルマ語を母語として生まれた。また C) の(6)はビルマ語のアナウンサーとして招聘されている事情から bilingualist と認めた。また B) の(4)はインダー方言を母語とするが、これはビルマ語という同一の言語内の場合なので C) の(6)の場合より、さらに問題はすくない。本人の説明を引用すれば、学校ではビルマ語 (myan-ma zaga:) を話し、故郷へ帰ればインダー語 (qin:dha: zaga:) を話すそうである。bilingualist と認めてよい。

資料選択の基準を、「現代におけるできるだけインフォーマルな、つまり格式ばった形でない、ビルマ語」に置いて、手紙や会話をたくさん選んだ。A) は大衆小説、B) は、(1)(2)は(3)(4)にくらべればいくぶんかたい文体であるが、概して口語体の平俗な手紙、C) は、(5)(6)が公式のインタビューという以外は、全く私的な会話である。

なお、本文中あげた用例には、(A1) (B1) …… (C7) のように符号でその出所を示す。

用例はすべて音韻表記で示し、その下に逐語訳をつける。必要な場合に限り意訳文を添え () でつむ。音韻表記は W. S. Cornyn & D. H. Roop. *Beginning Burmese*. (Yale U. P., 1968) の方式に従う。諸家の文法書および論文から引用した箇所も含めてすべてこの方式による。

3) Judson, A. *A Grammar of the Burmese Language*. Rangoon, 1951. (Revised ed.)

4) Lonsdale, A. W. *Burmese Grammar and Grammatical Analysis*. Rangoon, 1899.

5) Bridges, J. E. *Burmese Grammar*. Rangoon, 1915. 全体を説明したあと、literary と colloquial に分けてさらに特徴点を説明している。

述の枠については特に目新しい点はない。しかし、口語の観察の刻明なことは注目に値する。

ビルマ人自身によるものとしては、まず Taw Sein Ko (トーセイコウ) の文法⁶⁾ があげられる。彼は、この小著の序文で、ビルマには文法と呼ぶに値する土着の著作はないと述べ、新しい本格的なビルマ語文法を書く野心を示している。しかしこの著作は印欧語の文法の枠を一步も脱していない。Pe Maung Tin (ペイマウンティン) の文法⁷⁾ は土着のものとして高く評価されているが、現代語はおおむね排除されているし、品詞の分類については何の疑念もなく印欧語文法の枠を用いている。

ここでひとつ注意すべきことは、ビルマ人自身によるビルマ語文法に colloquialism を対象としたものが全くないという点である。ビルマ語研究の歴史をみると、文字にかかれたビルマ語、なかでもとりわけ古典的性格をもった雅語としてのビルマ語を対象して始まり、今まで続いてきたことがわかる。そこには言語そのものと文字とを同一視する傾向があったようである。さらにまた現代使われているビルマ語は、常にゆれうごいている状態にありビルマ語研究の対象となる資格がないと考える傾向もあった。⁸⁾

6) Taw Sein Ko. *An Elementary Grammar of the Burmese Language*. Rangoon: Hanthawaddy Press, 1949 (初版は1891年). Taw Sein Ko は Sino-Burmese. 大野徹「ビルマ語文献解題」(『A. A. 文献調査報告』第75冊, 言語・宗教10, 1964) pp. 34-35参照。(追加) 京都大学の西田龍雄助教授の御教示により、これとは別に Taw Sein Ko. *Elementary Hand-book of the Burmese Language*. 4th ed. Rangoon: American Baptist Mission Press, 1939 (初版は1898年) があることを知った。これは前者より記述が詳細で、口語の扱いが重視されている。前者はこれの Part II. Literary および Appendices の一部をとりだして編集したものである。

7) Pe Maung Tin/hpei-maun-tin/. *myan-ma dhada* (Burmese Grammar. Rangoon, 1956.) ; d° *myan-ma we'ca. hpwe.htoun: can:* (Burmese Syntax. Rangoon, 1951.) 大野徹「ビルマ語文献解題」pp. 35-36参照。Pe Maung Tin には、この種のものが他に二、三あるが、内容の骨子は上記の著作と基本的に同じである。

8) 筆者は、この事情を如実に物語る次のような体験をした。2年ほど前、あるきっかけでビルマの留学生 U Ohn Kyaw (注2参照) に Stewart の *Manual of Colloquial Burmese* (後述) という文法書の題名のビルマ訳について尋ねたことがある。彼はしばらく考えてから、どういう本だと説明を求めたので、文法の本だと答えると、Colloquial Burmese の文法などというのはないといって筆者を困らせた。Pe Maung Tin *myan-ma we'ca hpwe.htoun:can:* の序文にも同様の趣旨の説明がある。

また、ビルマには人口に膾炙する yei:do. qahman, hpa'to. qathan (書く時は正しく、読む時は音の通りに) ということばがある。これは綴字と音声 (speech-sound) との関係性を述べたものであるが、根底には文字に書かれた言語と音声のみの言語とを全く別のものとする考えがあることをいみじくも物語っている。(原田正春『ビルマ語入門』(後述) p.24参照。「これは決して両者が一致しなくともいいことをうたっているわけではないのだが、一般のビルマ人は、どうやらこのことばを現状肯定の根拠にしたり、はなはだしきに至っては、むしろ一致しないのが正しいのだと誤解している。)」

また、ビルマ語で myan-ma sa といえば「ビルマ語」のことを意味する。sa は文とか文字とか、要するに書いたものをいう単語である。ここにも文字と言語とを同一視する見方が現われているといえないこともない。シナ語の「緬文」miǎnwén (ビルマ語) 等についても同じことがいえるだろう。つまり言語研究の対象となりうるのは、文語だけであるという考え方の現われと見られるのである。なお、ビルマにおける言語研究については、大野徹「ビルマ語文献解題」、原田正春「ビルマにおける国語研究の現状」(『大阪外国語大学学報』9.1961) 参照。ビルマには伝統的な国語学・国文学・民族学・歴史学等の面からの言語の研究者はいても、いわゆる一般的な意味での方法論を身につけた言語学者はほとんどいないようである。しかし近年この方面への関心も徐々に高まりつつあると聞く『大学学術紀要』(te'gadhou pin-nya badei-tha sa-zaun) 第2巻・第4部, 1967 には、ラングーン文理科大学ビルマ語・助講師 Daw Khin Aye/do hkin-gei:/ (ドー・キンエイ) による言語学 (ba-dha bei-da.) 紹介の記事がある。

再び欧米のビルマ語学者の著作についてみてみよう。Stewart (スチュアート) の文法⁹⁾は、それ以前のものと比べると著しい変化をみせている。彼は *Introduction* の序文で、Judson は 6 品詞、のちの文法家は 8 品詞をたてているが、実際は full-word (noun, verb) および form-word (particle) の 2 種をたてるだけで十分であり、それ以上のものを認める根拠はないと述べている。また *Manual* ではビルマ語の品詞は noun, verb, particle である (p. 10, par. 20) と述べている。Cornyn (コーニン) の文法¹⁰⁾ は、Stewart の試みをさらに徹底させたものとして注目に値する。*Outline* の序文で、彼は syntax の予備的な分析を終えてしばらくのちに、幸運にも英国から Stewart の *Introduction* が手にはいり、Stewart の品詞分析が自分自身の分析に確証を与えることになったと述べている。しかし、一方この言語に 2 品詞 (つまり Stewart が *Introduction* でいう full-word, form-word のこと) を認めるという一致点を除けば、Stewart と自分の考察にはほとんど共通点がないとつけ加えている。事実、Stewart と Cornyn では、名詞・動詞に助詞が接続していろいろな機能を果たすというこの言語現象の扱い方に関して異なっている。Cornyn の文法は根本が *Outline* に示されていて、その実際面における具体的な説明が *Spoken* と *Beginning* に述べられているといっていよい。この三つの著作に貫かれている態度は、colloquial Burmese を対象とし、文字に書かれた言語にとらわれず native speaker (informant として) の発する音声に忠実であろうとする点である。彼の文法の特徴は、整然としていて明解なことである。こういった明晰さのある反面、言語現象の分析が細部にまで必ずしもゆきわたっていないという不満も抱かせる。Minn Latt (ミン・ラット) の文法¹¹⁾ は、word formation や sentence structure という見地から品詞の問題を扱ったかなり大がかりなものである。彼は *Contribution* の冒頭で Judson や Taw Sein Ko など 19 世紀の文法の品詞分類は印欧語の強い影響を示していると述べ、品詞分類に関していままでビルマ語学者の書いた文法にみられる特徴をそれぞれあげて説明している。彼自身は独自の立場から lexical word と grammatical word という二つの大区分をたて、その下にいくつかの小区分をたてている。筆者にとっては未見であるが、Cornyn の *Outline* の序文と Minn Latt の

9) Stewart, J. A. *An Introduction to Colloquial Burmese*. Rangoon, 1939. (以下 *Introduction* と略称する。)

d°. *Manual of Colloquial Burmese*. London, 1955. (以下 *Manual* と略称する。)

10) Cornyn, W. S. "Outline of Burmese Grammar," *Language Dissertation* No. 38, Suppl. to *Language* 20:4, 1944. (*Outline* と略称する。)

d°. *Spoken Burmese*. Book 1-2. U.S.A., 1945-46. (以下 *Spoken* と略称する。)

d° & Roop, D. H. *Beginning Burmese*. Yale U.P., 1968. (以下 *Beginning* と略称する。)

11) Minn Latt. "A Contribution towards the Identification of the Word and the Parts of Speech in Modern Burmese," *Archiv Orientální*, 27. Praha, 1959. (以下 *Contribution* と略称する。)

d°, "First, Second & Third Reports on Studies in Burmese Grammar," *ibid.* 30, 31, 32 (1962, 1963, 1964).

Minn Latt/min:la' は、チェコスロバキア、プラハ在住のビルマ語学者。彼自身はビルマ人であるが、この文法はヨーロッパの言語学界のひとつの成果とみるべき性質のものである。

Contribution の冒頭の部分によれば, Grant Brown, R. *Half the Battle in Burmese*. London, 1910. は, 以上のような品詞分類に関する考え方において先鞭をつけた 著作であるという。

日本のビルマ語学者はこの問題をどう扱ってきたか。戦時中, 五十嵐智昭 (いがらし ちしょう) が Judson の文法の訳注書¹²⁾を書いた。彼は緒言でビルマ語文法は日本語と同様に (と著者は信じるのであるが), 体言・用言・助語の三分法をもってするのが妥当であると述べ, 品詞論の箇所 (pp. 27-28) でもうすこし詳しく説明している。矢崎源九郎 (やざき げんくろう) もいままでの品詞の分類とは違った 別個の文法範疇を考える必要がありそうであると述べている。¹³⁾ 原田正春 (はらだ まさはる) の文法¹⁴⁾は, 「入門」では文法篇で名詞類・陳述部・助詞というふうに分けて説明しているが, 「基礎」ではそういう大きな区分ははずして細分している。三人三様に印欧語の文法の枠をビルマ語にそのままあてはめることについて非常な疑問を感じているにもかかわらず, それに代わるべき自分の考えを明解詳細に具体化するには至らなかった。

4. 以上みてきたように, 言語学の進展とあいまってビルマ語にふさわしい文法の枠が設定されるようになってきた。品詞分類についていえば, Stewart, Cornyn, Minn Latt の試みは, それ以前のものとは比べて著しい相違を示している。三者にみられる共通の精神は, ビルマ語文法に印欧語の文法の枠を転用するのではなくビルマ語自身の中からひきだされるべき枠を設定しようということにある。

Stewart	(Introduction, 1939) (Manual, 1955)
	full-word ———→ $\begin{matrix} \nearrow \text{noun} \\ \searrow \text{verb} \end{matrix}$
	form-word ———→ particle
Cornyn (1944)	free form (noun, verb)
	bound form (particle, proclitic, enclitic, rhyming syllable)
Minn Latt (1959)	lexical word
	grammatical word (下位区分は省略)

三者の品詞に関する考え方を整理し図示すると上のようなになる。以前のビルマ語文法における品詞分類が, 大部分その単語の機能とは別に意味によって印欧語の品詞の枠にあてはめることによってなされていたのに対して, この三者の文法における品詞分類はおおのこの単語の文法的機能に基準をおいている。下位区分に関しては, それぞれちがったゆき方をしているが, それはさほど重要なちがいはない。

12) 五十嵐智昭『ビルマ語文法』旺文社, 昭和18 (1943)。Judson, A. *A Grammar of the Burmese Language*. London, 1888. の邦訳。随所に施されてある訳者の注には, 当時としては斬新なものが見られ, その価値は高い。

13) 矢崎源九郎「ビルマ語」(市河三喜・服部四郎共編『世界言語概説』下巻, 研究社, 1955) p. 925, 注 1

14) 原田正春『ビルマ語入門』江南書院, 1958。(以下「入門」と略称する。)

同 『基礎ビルマ語』大学書林, 昭41 (1966)。(以下「基礎」と略称する。)

なお, ビルマ語の述部については, 原田正春「ビルマ語述部要提」(『東南アジア研究』2巻2号, 1964) に詳しい。

本稿では、上に述べた Stewart などの品詞分類の見解が妥当と認められるので、それを採用してそれぞれ「名詞」「動詞」「助詞」と呼ぶことにする。そして以下において、その三品詞と数の範疇とがどのような関連をもってビルマ語の中で具現されるかを考察してゆくことにする。

Ⅱ 名 詞 と 数

1. 名詞に関して数の範疇のタイプにはおおむね次の二つがある。単数・複数のセットと単数・双数・複数のセットである。またそれを言語化するのにとる手段としては、語形変化や助詞の連接などがある。ビルマ語の場合は、数の範疇のタイプとしては単数・複数のセットが考えられ、また言語化する手段としては、複数助詞の連接をあげることができる。¹⁵⁾

2. ビルマ語では、名詞に複数助詞 *-mya:*, *-tou.*, *-twei*¹⁶⁾ を接続して、名詞の複数を表わすといわれてきた。では、これらの三つの形式の間にはどのような意味のちがい、機能のちがいがあるのか。

Pe Maung Tin は次のように述べている。¹⁷⁾ *-mya:*—カズをはっきりと表示しないが、少数ではないという意味を表わす。*-tou.*—全部をまとめひっくるめてという意味で多数を表わす。*-twei*—全部をまとめひっくるめてという意味を表わす。Taw Sein Ko は、*-mya:* は一般に無生物に対して、*-tou.* は人または有生物に対して用いられると述べている。¹⁸⁾

Judson は、複数はい *-tou.* によって表わされるが、時には形容詞の *-mya:* がそれにとってかわることもあるとしている。¹⁹⁾ Lonsdale は、*-mya:* は形容詞であるが複数の接辞として用いられ、一方 *-tou.* はもっぱら有生物を表わす名詞について複数を表わすが、これは厳格にまもられているわけではないとしている。²⁰⁾ Bridges は、代名詞の複数はい *-tou.* によって表わされると述べている。²¹⁾ Stewart は、*-tou.* は人称代名詞にとって適切な接辞であり、*-twei* は集合的な複数を表わすとしている。²²⁾ Cornyn は *Beginning* で、*-mya:* は複数、そうでない場合は不定のあるいは漠然としたカズを表わすとし、また *-tou.* については人称代名詞との結合例しか示していない。*-twei* は複数ということを強調する場合にのみ用いられるのであって、その使用は英語における複数ほど一般的でないと述べている。また *-mya:* と *-twei* を比較して、一般

15) 複数を示すのに複数助詞の連接によらずに、疊語 (reduplicated form) による場合もある。qapyi-byi (国々) <pyi (国), qamyou:myou: (いろいろ) <qamyou: (種類) など。しかし、これは限られた名詞に限られた場合にしか起こらないので、ここでは扱わない。なお名詞の複数を示す助詞を「(名詞の) 複数助詞」と呼ぶことにする。

16) その他 *-mya:dou.* など、これらの複合形をいくつかあげている文法書もあるが、現代語ではほとんど現われないので、本稿ではふれない。

17) Pe Maung Tin // *myan-ma dhada* // pp. 116-18.

18) Taw Sein Ko, *op. cit.*, p. 15.

19) Judson, *op. cit.*, p. 16.

20) Lonsdale, *op. cit.*, pp. 43 ff.

21) Bridges, *op. cit.*, p. 11.

22) Stewart, *Introduction*. pp. 23ff., *Manual*. p. 17.

に *-mya:* は *-twei* より漠然・不定の意味がつよいとし、*-twei* のほうがより一般的に用いられる形式であると説明している。²³⁾ また *Spoken* では *-mya:* は不定の複数、*-twei* は集合の複数であるとしている。²⁴⁾

3. *-mya:* は、Pe Maung Tin や Lonsdale の説明をまづでもなく、動詞 *mya:de* (多い) に由来する²⁵⁾ ことは明らかである。*-mya:* については次のような用例がある。

qamyau: dhami: yi: za: mya: (C1), japan mei' hswai: mya: (B2)

女 性 の 恋 人 たち 日 本 の 友 人 たち

hsaya: mya: (C3), caun: dha: mya: (C3), myan-ma tho: ta: hyin: mya: (C6)

先 生 たち 学 生 たち ビルマ の 聴 取 者 たち

sa-qou' mya: (B2), yin-cei: hmu: mya: (B2), mu-la: dan: caun: mya: (C5)

本 文 化 小 学 校

ce-galei: mya: (A1), qahma: mya: (B1), qacaun: qaya: mya: (B3)

星(dim.) 誤 り 事 柄

-tou. を有生物（人間も含めて）に用いるのに対して、*-mya:* は無生物に用いると述べている文法家が多い。しかしこの区別は厳格にまもられているわけではないと指摘している文法家もいるように、単なる原則にすぎない。²⁶⁾ 事実 *-mya:* は、有生物・無生物の差別なく用いられている。上にあげた用例はそのうちのいくつかにすぎない。*-mya:* と *-tou.* のちがいは、無生物・有生物との関連性よりむしろカズのとらえ方のちがいとみるべきだと思われる。これについては、あとで述べる。

4. *-tou.* については、次の用例がある。

cun-do: dou. (C1), hkamya: dou. (C3), thu: dou. (C1), kou: dou. (A1)

私 たち あ なた たち か れ たち 自 分 たち

yin-cei: hmu: dou. (B2), yi-hman: je', youn-ci: je' tou. (A1)

文 化 志 や 信 念

japan pyi: dou. (B2), kou hla: wei: dou. (B4)

日 本 国 コウ・ラウェイ たち

この場合も生物との必然的な関連性は認めがたい。しかし、*-tôu* は人称代名詞あるいは人名に対して用いられる場合をのぞけば、その用例はきわめてすくない。

5. では、*-mya:* と *-tou.* のちがいはどこにあるのか。Pe Maung Tin は、前述のように、

23) Cornyn, *Beginning*. pp. 60ff., p. 78, p. 129.

24) Cornyn, *Spoken*. p. 131, p. 164.

25) Pe Maung Tin || *myan-ma dhada* || p. 116; Lonsdale, *op. cit.*, p. 44.

26) ビルマ人 U Aung Myint (注28参照) による次のような説明がある。彼は筆者との雑談の最中、話が *-mya:* と *-tou.* のことにふれるや、すぐ *-mya:* は無生物(inanimate), *-tou.* は有生物(animate) に対して使うと述べた。この事実は、ビルマ人の言語意識にそういう区別が存在するのではないかという推測をおこさせる。しかし彼自身の使う言語においてもこの区別は守られていない。なお、Pe Maung Tin はこの区別については全くふれていない。

mya: は「カズをはっきりと表示はしないが、少数ではないという意味の複数」を表わし、-tou. は「全部をまとめひっくるめてという意味の複数」を表わすと説明している。Cornyn は、-mya: は「複数」、さもなくば「不定あるいは漠然」を表わすとしている。-tou. については、人称代名詞との結合例しか示していないのは、この書物が口語ビルマ語を対象としたものである点を考えると、現代口語において -tou. が人称代名詞以外の語について用いられることのまれな事実注目した結果と思われる。-mya: と -tou. のちがいは、この両者の説明を総合したあたりにみいだされるのではないか。²⁷⁾ この問題については、ビルマ語の native speaker がどういう意識をもって使いわけているのかをつぶさに調査する必要がある。ここでは最近たまたまビルマ人から聞いた次の説明をあげるにとどめたい。

(1) rei-di-you-dou. sa-qou'tou. hyi.ba-de

ラジオ も 本 も あります。

(2) di qahkan:de:hma rei-di-you-mya: hyi.ba-de

この 部屋の中に ラジオ が あります。

説明してくれたのは、下ビルマのタトウン出身の U Aung Myint²⁸⁾ である。彼の説明によると、口語では上のように使いわけるということである。もし(1)のような列挙 (enumeration, 日本語の「…も…も」のような表現—U Aung Myint による) の文において、-tou. を -mya: に置きかえると文語的 (sa-pei hsan-de) な表現になるという。また(2)の文では -tou. は用いられないそうである。以上を解釈すると次のようになる。(1)のように列挙を示す文に -tou. を用いるのは、Pe Maung Tin のいう「まとめひっくるめた意味の複数」という意識が働いているからだと考えられる。この文の趣旨が個々の物のカズの指摘にあるのではなく、個々の物それ自身の指摘にある点を考えれば、-mya: を用いず -tou. を用いるわけはうなずける。(2) の文で -tou. を用いず、-mya: を用いるのは、ラジオが何台かある、つまりカズに関心がむけられる結果ではないか。

6. -twei²⁹⁾ は、文語をおもな対象としている文法家はとりあげていないが、次のような用例がある。

qahpou:ji:dwei (B1), poun-byin-dwei (B3), sei'twei (B3), gabya-dwei (B4)

おじいさん たち

民 話

心

詩

27) Dagon U San Ngwe/dagoun qu: san-ngwei/ (ダゴウン・ウー・サングエイ) は、-mya: を不確かな推測複数、-tou. を確かな複数を表わすと定義し、有生物・無生物については全くふれていない。また、古来、複数助詞として -tou. が用いられてきたが、-mya: の出現でその位置を奪われるようになったと述べ、-mya: を文章語 (sa-pei zaga:) でなく、芝居語 (za' zaga:)・方言 (qaya' zaga:) であるとしている。(Dagon U San Ngwe || dhada. mye'loun: yei: hpa'htoun: 「文法の主眼点」|| Rangoon, 1967. pp. 85 ff.)

28) U Aung Myint/qu: qaun-myin./ (ウー・アウンミン) 27才。ラングーン経済大学 (Institute of Economics, Rangoon) 卒。陸運局技官。ラングーン外国語学院で日本語を学び、1968年10月来日。大阪外国語大学留学生別科に在籍していた。言語に関して sophisticated な性格ではない。

29) -twei は colloquial Burmese では -tei と発音されることがある (corruption)。

kwe: pya:hmu.dwei (B4), japan pyi-dhu-dwei (B4), kala:dwei (C2)

ち が い 日本 国民 たち インド人たち

myan-ma qamyau:dhami:dwei (C1), hsaya-dwei (C3), qe:da-dwei (C7)

ビルマの 女性 たち 先生 たち それ ら

hpo-ywei-hmu.dwei, hkin-min-hmu.dwei (C5), mei:da-dwei (C6)

つきあいやすさ 親 し さ 尋ねること

myan-ma sa, myan-ma ya-zawin-dwei (C4), htuzan:da-dwei (C2)

ビルマ 語 ビルマ 歴史 珍しいこと

-twei は会話から得た資料に圧倒的に多くみられる。したがって、これは口語にのみ使用されてきた助詞ではないかという推測がなりたつ。また、これをうらづける次のような事実がある。あるきっかけで、Cornyn の *Outline* の中に出てくるビルマ語の用例をビルマ文字になおして印刷した資料を、ビルマの友人 Ko Soe Maung³⁰⁾ に送ったことがある。彼はていねいにも資料の中の誤りを一々指摘してくれた。そのうちにはミスプリントの箇所もあったが、Cornyn が原文で -mya: , -tou. と記述しているところをすべて -twei (ただし人称代名詞についてはそのまま) と訂正したことは注目に値する。彼はその理由をこう説明している。話す時はたいてい -mya: の代わりに -twei をわたしたちは使う。口語では -tou. や -mya: の代わりに -twei を使うのである、と。できるだけ話すような調子で書く (いわゆる言文一致のこと) のを信条としている彼の手紙には、事実このような -mya: や -tou. の用例はほとんど見あたらない。Cornyn の *Outline*³¹⁾ にあがっている例文はたてまえからすれば、あくまでも口語を対象としたものであるから、Ko Soe Maung の説明や訂正をそのまま全部承認することはできないだろう。しかし事実を照らしあわせてみると、彼の説明は現代ビルマ口語における -twei の使用の姿をほぼ的確にいいあらわしているといえる。これは、また、当の Cornyn が *Beginning* で -twei は複数助詞として、より一般的に用いられる形式であると述べているのとも合致する。

-twei の意味については、Pe Maung Tin や Stewart, Cornyn などが、すでに述べたような説明をしていることからみると、集合体としてもものをとらえる場合に用いると考えられる。

7. 最後に、名詞の複数助詞 (-mya: , -tou. , -twei) 全体の機能について述べよう。個々の使いわけについては前節までに述べたが、これらの助詞に共通な働きをみるのがビルマ語の数の範疇を考える上では、さらに重要である。

8. 複数の概念とは、一般にどのようなものであるのか。Jespersen (イエスペルセン) の説明³²⁾ を引用すると次のようになる。

1. The Normal Plural

30) Ko Soe Maung. 注2参照。

31) Cornyn, *Outline*は、主として Maung Shwe Wain (下ビルマ出身) を informant として記述された。Cornyn, *op. cit.*, p. 5 参照。

32) Jespersen, O. *The Philosophy of Grammar*. London, 1955 (1st ed. 1924), pp. 190-92.

The simplest and easiest use of the plural is that seen, e.g., in *horses* = (one) horse + (another) horse + (a third) horse... (We might use the formula: $Apl. = Aa + Ab + Ac \dots$)

2. Plural of Approximation

...the plural of approximation, where several objects or individuals are comprised in the same form though not belonging exactly to the same kind. ... Ex. *sixties*, ...*we*, ...
さて、ビルマ語の名詞の複数助詞には大きく分けて三つの機能があると考えられる。

- (1) $Apl. \longrightarrow Aa + Ab + \dots$
 (2) $Apl. \longrightarrow A + others$
 (3) $(A + B + \dots)pl. \longrightarrow A + B + \dots$

(A, B, ... は個々の名詞を, pl. は名詞の複数助詞を示す。)

(1) の場合は, Jespersen のいう正常複数の概念にあたる。

pan:mya: (A1), japan mei'hswei-myā: (B2), qa:la'ye'mya: (B2)

花 日本³³⁾の友人 たち 休日

caun:dha:mya: (C3), pou'gou-myā: (C5), japan si'tha:dwei (B3)

学生 たち 人物 たち 日本³³⁾の 兵士 たち

mein:kalei:dwei (C1), tayou'twei (C2), zaga:dwei (B4)

少女 たち シナ人³³⁾たち ことば

hsaya-dou. (B1), caun:dha:dou. (C4), japan lu:myou:dou. (C6)

先生 たち 学生 たち 日 本 人 たち

前³³⁾の名詞が単一の個体でなく何らかの意味で複数性を帯びていることをはっきりと打ち出した
いという意識の働きで複数助詞を用いていると考えられる。³³⁾

(2) の場合は, Jespersen のいう近似複数の概念に非常にちかい。これは一人称代名詞と固有名詞の場合, 最も顕著にあらわれる。

cun-do-dou. (C1), cama-dou. (B2), kou-dou. (A1), mei-mei-myā: (A1)

わたし たち わたしたち 自分 たち おかあさんたち

kou hla.wei-dou. (B1), qu: maun-maun-sou:tin.dou. (C6)

コウ・ラウェイ³³⁾たち ウー・マウンマウンソウティン³³⁾たち

kou mou:hswei-dou. tha: qami. (A1), japan pyi-dou. (B2)

コウ・モウスエイ³³⁾ たち 息子と母(親子) 日本国

代表となる名詞をあげ, それに複数助詞を接続すると, その名詞以外にそれと関係のあるものがいくつか含まれることを言外に示す働きをする。たとえば, A, B, C... とあるなかで Apl. といえ³³⁾ば, A および B, C... 全部を含む意味になる。A だけを明示し, B, C... は明示せずその存在を言外に漠然と表わすのは, B, C... を無視したくはないが, 特に言及する必要を認め

33) Cornyn は, ビルマ語には単数・複数の区別がほとんどないと述べ, *qahkan: kaun:de* 'the room is good' or 'the rooms are good' という例をあげて説明している (*Spoken*. p. 27, p. 131)。

ない気持ちが働くからであろう。日本語の「たち」「ども」「ら」や「など」にもこのような意味がある。

(3)の場合は(1)(2)とちがって、この複数助詞の有無により、基本的な意味の変化は起こらない。

cama.ne. cama. hkin-pun:dou. (B2), myan-ma sa, myan-ma ya-zawin-dwei (C4)

わたしと わたしの配偶者 ビルマ語, ビルマ 歴史

maun tin-thein:, maun win:kou, hkin-cwe-qu:dou. (B1)

マウン・ティンテイン, マウン・ウィンコウ, キンチュエーウー

mi. ba. mya: (A1,) japan pyi-dhu-ne. bama pyi-dhu-dou. (B4)

母 父(父母, 両親) 日本 国民 と ビルマ国民

qu: maun-maun-nyun.ne. cano-dou. (B4)

ウー・マウンマウンニョン と わたし

yei-qu: myou., daba.yin: myou., daze-myau.myau: (B1)

イエイウー町, ダバイン 町, ダゼー 町

pa-li. sa-pei hta-na.ga. pa-mau'hka., thamain: hta-na.ga. pa-mau'hka.ne. mo-gun:dein:dou.

パーリ 文学 科 の 教授 歴史学 科 の 教授 と 記録官
(B1)

名詞をいくつか羅列して、最後に複数助詞をつける。この場合の複数助詞は全く随意的 (optional) なものであり、用いられない例もかなりある。

zani: maun-hnan (B2), mi.gin hpa.gin. (B1), cano-ne. hsaya (B4)

妻 夫(夫妻・夫婦) 母 父(父母・両親) わたしと 先生

kou hla-wei-ne. cano (B4), cun-do-ne. qu: htun:hywei (C5)

コウ・ラウェイとわたし わたし と ウー・トゥンシュエイ

kou mou:hswei-ne. ni-la (A1), qin:lei: zaga:, danu. zaga:, taun-you: zaga: (B4)

コウ・モウスイ と ニーラー インレイ 語(方言), ダヌ語(方言), タウンヨウ語(方言)

この点については、五十嵐智昭が、ビルマ語の複数は印欧語の複数概念の表示と異なることを的確に指摘している。³⁴⁾

以上三つの場合について述べたが、これらの用法は実際には互いに錯綜しているので、その場の状況 (situation) や文脈 (context) によって見わけられるにすぎない。

9. では、複数助詞を伴わない名詞は数に関していったいどのような性質をそなえた形式であるのか。今までの文法家の多くは、ビルマ語の数について単数・複数の対立があるものとして説明してきた。複数助詞を伴わない名詞は単数であると決めてかかっていた。Judson は、複数助詞を伴わない名詞は総称的 (generic) な意味をもつことを述べている³⁵⁾が、これも印欧語の generic singular になぞらえたもので、単数・複数という厳密な対立を否定した上での見解

34) 五十嵐智昭, 前掲書。p. 30, §53 [備考]。

35) Judson, *op. cit.*, p. 15.

ではない。ビルマ語で *lu* (人), *sa-qou'* (本) などといった場合, 「人」や「本」のカズについては特別な関心が払われていないのである。ビルマ語の場合は, 印欧語のように名詞の単数形が常にその複数形の存在を意識して用いられるのとは, 事情がちがう。ビルマ語においては, 普通名詞に関する限り単数・複数の厳格な対立は存在しない。したがって複数助詞の使用も随意的 (optional) である。

ところが, 人称代名詞の場合はいささか事情が異なる。人称代名詞には, 単数・複数の厳格な対立が存在する。³⁶⁾ *cun-do*, *cama*. (わたし), *hkamya:*, *hyin* (あなた), *thu* (かれ) など, おのおのこれに *-tou*. のついた複数形の存在を意識して用いられる。つまり「わたしたち」「あなたがた」「かれら」というべきところには, 必ず人称代名詞+*:tou*.³⁷⁾ の形式を用いるのである。このことは, 具体的な複数のカズを示す単語とともに用いられるときの普通名詞と複数助詞の関係を思い起こし, 人称代名詞の場合と比べれば, 明らかである。「人3人」「本3冊」という時, *lu thoun:yau'*, *sa-qou'*, *thoun:qou'* といって, 複数助詞を用いない。³⁸⁾ これはカズが別の語によって明示されているので, さらに複数助詞を用いる必要はないという理由によるものである。ここにもビルマ語の複数助詞の性格の一端があらわれている。しかし一方, 人称代名詞の場合は, 具体的な複数のカズが明示される場合でも, 複数助詞が必ずそのまま用いられる。

thu-dou. hnayau' (A1), *thu-dou. hnaqu:* (A1), *kou-dou. hnaqu:* (A1)

かれら 2人 かれら 2人 自分(わたし)たち2人

ビルマ語の場合, 名詞の数に対する関心は普通名詞と人称代名詞では異なっていて, 普通名詞については単数・複数の区別が厳格でないのに反して, 人称代名詞では単数・複数の厳しい対立が存在するといえる。

Ⅲ 動 詞 と 数

1. 動詞の表わす動作や状態それ自体の複数性を表わすには, ビルマ語では多くの言語の場合と同様, 副詞の働きに依存するか, もしくは, 動詞の重複による。つまり動詞の真の複数はいくつかの言語においていわゆる反復相 (iterative) によって表わされるところのものであるという Jespersen の説明³⁹⁾が, そのままあてはまるのである。たとえば, *tahka tahka la-de*

36) 新村出も, 数について厳格でない言語においても, 代名詞は一面名詞に比して単複の区別が嚴重である, と述べている。(『言語学序説』(改訂版) 星野書店, 昭和41年(重版). pp. 102-03.)

37) Stewart は, *cun-do-mya:* という形式が近年聞かれるようになったけれども, この形式はまだほとんど確立していないと述べている (*Introduction*, p. 23.). また U Aung Myint (注28参照) も, 田舎へ行けば, あるいはラングーンでもたまには *cun-do-mya:* という形式が聞かれるという。しかしながら, 共通語としては人称代名詞+*tou*. の形式を一般的と考えてさしつかえない。

38) 次の用例参照。 *lu-nge lei:qu:* (若者4人), *mi.ba. hnapa:* (両親2人), *le'hma' hnasaun* (切符2枚)(以上A1); *caun:dhu caun:dha: hnahtaun* (学生2000人), *qein thoun:ya* (家300戸)(以上B1)(10以上の満数の場合は一般に助数詞を省く)。

39) Jespersen, *op. cit.*, p. 210.

(しばしば来た。), ci. ci. nei-de (しきりに見ている。)などである。

しかし、それはさておき、ここでは動作の主体が複数である場合に動詞に接続される複数助詞⁴⁰⁾ -ca., -koun について述べる。

2. これについて Pe Maung Tin は次のように説明している。-ca. は「それぞれ」が行なう・起こる・存在することを特に明示するために用い、-koun は「全部」が行なう・起こる・存在することを特に明示するために用いる動詞の複数接尾辞である⁴¹⁾ と。つまり -ca. は「それぞれひとつずつ」、-koun は「全部ひとつ残らず」を意味する⁴²⁾ というのである。Judson は、-ca., -koun を動詞の複数をあらわすとし、しばしば省略され、複数の概念は名詞の複数助詞によって示されるか、あるいは前後の文脈によって理解される⁴³⁾ と述べている。Lonsdale もほぼ同様のこと⁴⁴⁾ を述べている。Stewart は *Introduction* で動詞助詞として -ca., -koun をあげ、動詞の複数を表わすとしている。そして彼は、-koun は動詞 koun-de (尽きる) に由来するとして、この意味が動詞助詞としての -koun の用法の基礎になっている⁴⁵⁾ と述べている。また *Manual* では -ca. は複数の動詞助詞であり、一般にそれぞれ個々別々に行なわれた動作を示すとし、一方 -koun は完結を表わし、しばしば強めを表わす⁴⁶⁾ と説明している。Cornyn は -ca. のみを取りあげ、複数を明示するとし、次のような対比をもってこの複数助詞の性質を説明している。

sa:de refers to one or more than one person.

sa:ja.de refers only to more than one person.⁴⁷⁾

Allott (アロット) は *severality* をあらわすとし、次のように述べている。⁴⁸⁾ lu thwa:de (人は行く) といえはひとりの人が行くのか、それ以上の人が行くのかはわからない。正確なカズは数詞と助数詞にによってあらわされる。それに対して thwa:ja.de は、何人かの人がおのおの同じことをするというを表わす。このような文では複数の主体を示さなくとも複数の主体が行動することは明らかである。つまり -ca. は動詞がいくつかの個々の動作、できごと、状態にあることを表わすのである。

動詞の複数助詞としては、現代ビルマ語では、もっぱら -ca. が用いられるようである。こ

40) 以下「(動詞の) 複数助詞」と呼ぶことにする。また、「動作の主体 (agent)」という時の「動作 (action)」は「動作あるいは状態」の略である。動詞の複数助詞には、-ca.goun という複合形をあげている文法書もあるが、現代語ではほとんど現われないので、本稿ではふれない。

41) Pe Maung Tin // *myan-ma dhada* // p. 250.

42) *Ibid.*, p. 252.

43) Judson, *op. cit.*, p. 41.

44) Lonsdale, *op. cit.*, pp. 219-20.

45) Stewart, *Introduction*. p. 47.

46) Stewart, *Manual*. p. 31.

47) Cornyn, *Beginning*. p. 282.

48) Allott, A. J. "Categories for Description of the Verbal Syntagma in Burmese," *Lingua*, 15, 1965. p. 301.

の -ca. について, Stewart の *Manual* の「それぞれ個々別々 (severally) に行なわれる動作」という説明と, Allott の「severality」という説明が, Pe Maung Tin の「それぞれひとつずつ」という説明に一致するのは注目すべき点である。-koun は Stewart の説明のように動詞 koun-de に由来することは明らかであり, Stewart のいう「完結 (completeness)」⁴⁹⁾ の意味で用いられることも多く, 必ずしも複数助詞として用いられるとはいえない。⁵⁰⁾

3. 動詞の複数助詞は, 動作の主体が複数であることを特に明示したい意識が働いた時, 用いられるらしいことは推測できる。では, その動作の主体の数と動詞の複数助詞との間にはどのような相関関係があるのか。次のような場合についておのおのみてみよう。

(1) NN+V(pl.)

NN+V

(2) V(pl.)

V

(NNは複数の動作の主体を表わし, V(pl.) はおのおの動詞, 動詞の複数助詞を表わす。)

(1)は文中に動作の主体が示される場合であり, (2)はそれが示されない場合である。

4. (1)の場合についてみてみよう。動詞Vの表わす動作あるいは状態が複数の主体NNによってひきおこされる場合である。複数の主体NNは, 前章で述べた名詞の複数助詞の連接, あるいは二つ以上の名詞の呈示, あるいは具体的なカズの表示, あるいは集合概念をもつ名詞によって明示される。また, 「…とともに」「互いに」というような「共同」とか「相互」の概念を表わす語句を伴う場合も動作の主体の複数性を表わすが, これについてはあとで別に述べる。

用例として次のようなものがある。

maca-gin-bin kou mou:hswei-ne. ni-la-dhi mya.san-da-dhou. yau' thwa:ja.lei-dhi (A1)

まもなく コウ・モウスウェイと ニーラーは ミヤサンダー へ 着 い た

myou.hma. hsin:ye:dha:mya: nga' nei-ja.ba-bi (B1)

町 の 貧 民 たち は 飢えている

caun:dha: ce'taun qahpwe. la-ja.ba-lein. me (B4)

学生 バドミントン・チームが来る だろう

49) Stewart, *Manual*. p. 31.

50) 筆者の集めた資料から, 複数助詞かと思われる -koun の用例はわずかに二つしか見つからなかった。

si' qatwin:ga. thin ca: hta:dhi. sa-mya:hma qalei. qacin. ne:dho:jaun. japan pyi pyan yau'koun-ba-bi
戦争 中 に 学 ん だ ことば は 練 習 が 少 ない の で 日 本 国 へ 帰 っ て い っ て し ま っ た (B2)

hkin-maraga. pye' nei-do. yanei. hsei: ci.ya, thoun:ze. hcau'saloun: pye'koun-ba-dhi (B1)

カ メ ラ が こ わ れ て い て き ょ う 現 象 し て み る と 三 十 六 枚 と も だ め に な っ た

以上の用例の -koun も, 複数助詞かあるいは一種の結果相 (conclusive) を表わす助詞か決めがたい。ただし, 次の場合は単語の位置から, 結果相を表わす助詞であることは明らかである。

wei'za-ne. thei'pan te'gadhau man:dalei: caun:dha:mya:, sa-mei:bwe: pi:ywei., qein pyan
文 理 科 大 学 ← マ ン グ レ イ の 学 生 ち ゃ ん は 試 験 が 終 わ っ て 家 へ 帰 っ

koun-ja.ba-bi (B1)

し ま っ た

cama.dou. matwei.bu:ja.ba (B2)

わたしたちは(neg.) 会ったことがない

qu: maun-maun-sou:tin. dou. be-do. pyan-ja.male: (C6)

ウー・マウンマウンソウティンたちは いつ 帰る か

tati.ya.hni' caun:dha:dou.ha hkamya:lou-be: pyo:nain-ja.ba-dhala: (C4)

第3 学年 学生 たち は あなたのよう に 話 せる か

そこで文が終わらず次に続く場合も同様に複数助詞は用いられる。

thu-dou. hnaqu:dhi maca-mi-bin le' hta'ca.yan si.za'pi: hpyi'lei-dhi (A1)

かれら 2人 は まもなく 結婚する ことを 約束した のである

cama.qi. yi-ywe-je'hma-li: qahyei. qa-hya. hnanain-gan hpyi'ca.dho: japan-ne. myan-ma

わたしの 志 は 東 アジア の 2 国 である ところの 日本 と ビルマ

hnanain-gan-qi. sa-pei yin-cei:hmu.mya:gou hpahle-yan... (B2)

両 国 の 文学文化 を 交流するため...

di japan pyi la-ja.me. ce'taun yai' qahpwe.hma cano. thange-jin:dwei pa la-ba-lein.

この 日本 国 に来る バドミントン ・ チーム に わたしの 友人 たちも随行してくる

me (B4)

だろう

myan-ma caun:dha: caun:dhu-galei:mya:hma yahku. qahka ta-wun-gou pou-ywei.

ビルマの 学 生 (dim.) たち は いま 責 務 を より多く

htan:hsaun nei-ja.ya.dhahpyin. thu-dou.li: mya:zwa qa:la'ca.myi.do. mahou'pa (B1)

果たして いる ので かれらも あまり ひま だとは (neg.) いえない

では、文中に複数の主体が示されていれば、常に動詞は複数助詞を伴って現われるかということ決してそうではない。NN+V には次のような用例がある。

do:tha.jaun. mye'loun:galei:mya:dhi-li: win:le'ywei. la-do.dhi (A1)

怒りのため 腫 (dim.) も ぎらぎら光ってきた

kou thin:hlain-ne. mi.mi.dou. hnayau'thi ni:za'yan to-do kwa-wei:lei-dhi (A1)

コウ・ティンラインと自分 2人 は 近づくには 相当 へだたりがある

gi-ta. sa-qou'mya:, qanu. pin-nya sa-pei-mya:dhi-ga: sein.qi. gadin be:dwin poun nei-

音楽の 本 芸 術 の 書 物 が セインのベッドのそばに 積まれ

bei-dhi (A1)

である

cama.dou. ta'nain-dhahmya. hsaun-ywe' pei:myi (B2)

わたしたちは できるだけ 尽力してあげよう

qu:lei: qacaun: qaya-mya:ga. ba-hma. mahtu:zan:ba-bu: (B3)

おじさんのこと は何も (neg.)変わったことではない

(おじさんのことといっても、とりたてて変わったことはない)

lu-qu:yei ne:ne:galei: hyi.de. lu-myou:mya:ye. poun-byin-dwei-le: pa-ba-de (B3)

人口の 少ししか ない 民族 の 民話 も 含まれている

pin-nya-yei: qahpwe.mya: hyi.ba-de (C5)

教育 委員会 が ある

te'kasi hsou-da-mya: hnahse. lei: na-yi hyi.ba-de (C5)

タクシーというの は 二十四 時間 ある

NN+V(pl.) と NN+V とのちがい、つまり動詞の複数助詞の使いわけには、何か一定の法則があるのだろうか。前述の下ビルマ、タトゥン出身の U Aung Myint は次のような説明をしてくれた。この複数助詞は (a)「動作」(movement)を表わす動詞についてよく用いられ、「状態」(state)を表わす動詞にはあまり用いられない。ただし *nei-ja.de* (住んでいる、…している), *hyi.ja.de* (いる、ある) は用いられる。また、(b) 主体 (subject) が無生物 (in-animate) である時は用いる習慣がない (*thoun:lei. mahyi.bu:*)。

(a)の点についてまず考えてみる。「動作」を表わす動詞によく用いられるというのは、「状態」をあらわす動詞にはあまり用いられないということであろう。しかし、彼のいう *nei-ja.de*, *hyi.ja.de* も含めて、「状態」を表わす動詞について複数助詞の用いられる用例として次のようなものがある。

kou mou:hswei-dou. tha: qami.dhi sein. qapo-hnai' hci'hkin cin-na-ge.ja.dhi-hma bawa.qi.

コウ・モウスイ たち 親子 が セイン に対して 親切で思いやりがあった のは 人生の
hmyo-lin.je'kalei: tahku. hpyi'hke.ya.lei-dhi (A1)

希望 (dim.) ←ひとつの であった

japan lu-myou:myaqi. cin-na hci'hkin-da'ca. boun, you:tha: pwin.lin:ja.boun-mya: jaun.

日本人 の 親切な 様子 率直な 様子 ゆえに
japan pyi-dhou. tahkau' qayau' la lou-dho: hsan-da. hyi.ba-dhi (B2)

日本 国 へ 一度 行きたい 気持 がある

cama.dou. qathu:bin wun: tha-ja.ya.ba-myi (B2)

わたしたちは 特に うれしいだろう

kou hla.wei-qi. mi.gin hpa.gin-ne. hswai-myou:mya: qa:loun: can:ma hcan:tha-ja.ba-zei (B1)

コウ・ラウェイの 両親 と 親戚 全部が 健やかで 幸せ であるように

mi'sata ISHIDO zani: maun-hnan-hma qahtu: dhabo: kaun:ja.ba-dhi (B2)

石堂 氏 夫 妻 は 特に 性格が よい (いい人である)

pa-li. sa-pei hta-na.ga. pa-mau'hka., thamain: hta-na.ga. pa-mau'hka.ne. mo-gun:dein:dou.

パーリ 文学 科 の 教授, 歴史学 科 の 教授 と 記録官
hpyi'ca.dhi (B1)

で ある

cama.ne. cama. hkin-pun:dou.dhi thwei:thau' me'gazin: pain-hyin-ne. qe-di-ta qahpwe.

わたしと わたしの 配偶者 は トウエイタウ 誌 の 社主 および 編集局員

win-mya: hpyi'ca. ba-dhi (B2)

である

qalou' ta-wun-mya: htan:hsaun nei-ja.ya.ba-dhi (B1)

仕事の 責務 を 果たして いる

cun-do qahtu:thahpyin. sei' win-za: nei-da-ga. japan pyi-hma ba-dha bei-da. lou'ngan:

わたしが 特 に 興味がある のは 日本 国 で 言語 学 の 活動

gou be-lou lou' nei-ja.de, hsou-da-ba-be: (B4)

を どのように 行なっている かということである

mei myou. hma nei-ja.ba-de (C7)

メイ ミョウ に いた

hsaya-ne. dagwa. zani:dhi-ba can:ma-zwa hyi.ja.ba-de (B2)

先生 とともに 奥さま も 元気で いる

hsaya. qein-dha:mya: qa:loun: can:jan: ma-ma hyi.ja.ba-de (B1)

先生の 家族 は みんな 元 気 で いる

maun tin-thein:, maun win:kou, hkin-cwe-qu: dou.hyi.ja.ba-de (B1)

マウン・ティンテイン, マウン・ウィンコウ, キンチュエーウーたちがいる

thu-dou.le: qan.qo: mahsoun: hyi.ja.ba-de (B4)

かれら も 驚いても(neg.)終わらなくある(驚きがつきない)

以上の用例をみれば「状態」を表わす動詞には複数助詞はあまり用いられないという意見に
疑念をもたざるをえない。

次に(b)の点について考えてみる。主体が無生物である時は用いる習慣がないというが、どう
であろうか。無生物の時でも用いられている例として次のようなものがある。

zei-di-hma. gu qatwin:dwin nan-yan hsei:yei: baji-mya: hyi.ja.dhi (B1)

パゴダの 窟院の 内部 に 壁 画 が ある

pan:mya:li: pwin.ja.de (B1)

花 も 咲いた

qapyin kaun:gin-we ce-galei:mya:dhi le' nei-ja.lei-dhi (A1)

外 の 空 には 星 (dim.) が 輝いていた

coun:de:hma pan:mya:ga.mu htou mou:jaun.bin pou-mou-ywei. pwin.ja.lei-dhi (A1)

濠の中 には 花 が その 雨 のために いっそうたくさん 咲いた

la.yaun-qi. qalin:yaun hlain:dun.galei:mya:dhi lei-de:we gi-ta.qi. hma'su.galei:mya:

月 の 影 の さざ波(dim.) は 空中 に 音 符 (dim.)

dhabwe pyei: hkoun hso. gaza: nei-ja.lei-dhi (A1)

の ように とんだり はねたり していた

以上(a)(b)の場合についてみた限りでは, native speaker の意識のなかで, この複数助詞がど

ういう位置を占めているのか判断をくだしがたい。さらに、次のような用例がある。

parei'tha' qe.dhe-mya:dhi mya:dhade' mya: la-lei-dhi (A1)

観 客 は 多く より 多く なってきた (ますます多くなってきた)

htu:zan:da-dwei-ga.do. mya:ba-de (C2)

めずらしいこと が 多い

mya:de (多い) という動詞に複数助詞を用いた例は他にもない。これは native speaker には「強調」を通りこして「冗長」に聞こえるからではないか。

qe:di qahcein-hma hnin:dwei-le: wei-hsain nei-de (B4)

その ころ は 霧 も たちこめていた

hce-ri-ban:dwei-le: pwin.ba-de (B4)

サクラの花 も 咲いた

hnin: (霧) とか hce-ri-ban: (サクラの花) とかは、個々のものに注目するよりむしろ全体をひとつのまとまりとしてみる気持があるから動詞に複数助詞を用いていないのではないか。これには名詞の複数助詞 -twei の意味 (「集合」; §§ I -5, II -6 参照) もいくぶん働いていると考えられる。しかしこの場合、動詞の複数助詞の使用をさまたげるような力はどこにも働いていない。次のような用例をみればわかる。

bama-dwei-ga. japan-mya:gou moun:de. sei'twei qamya:ji: hyi. nei-ja.ba-de (B3)

ビルマ人たちは 日本人 たち を 憎む 心 が 大いに あった

sei' (心) という抽象度の高い名詞である主体に対しても、それをうける動詞が複数助詞を伴っている例である。

qein-ji:hma tei'hsei' nei-dhahpyin. myi-dhu-hmya. hyi.ja.han matu-bei (A1)

家(aug.) は 静まりかえって いて 誰 も いる 様子は(neg.)ない

動詞の複数助詞を用いることにより、ふだんこの家にいる人がひとりでなくて、多いということがわかる。

結局、これは複数の主体を個々別々のものとみるか、全体を一体のものとみるかにより、-ca. を用いたり用いなかったりすると考えるのが妥当である。

5. 次に(2)の場合についてみてみよう。これは、動作の主体がその文中に直接示されない場合である。ビルマ語は、動作の主体が示されなくとも、常に文を形成できる言語である。そこでは、このような構造をもった他の言語と同様に、場の状況あるいは文脈がそれに代わる役割を果たす。文中に動作の主体が示されなくて、動詞に複数助詞の用いられる次のような例がある。

sei' win-za:ja.hma-be: (C1)

興味をもっている だろう

japan lu-myou:dou.ye. nei htain-boun-gou twei.ja.ba-lein.me (C6)

日本 人 たち の 生活 の 様子 を 見る だろう

thwin: hta:ja.yin makaun:bu:la: (C7)

入れて おけば (neg.) よくはないか

pyan-ja.zou.la: (A1)

帰ろ うね

myan-ma sa-gou be-lou thin ca: nei-ja.de, be-lou lei.la nei-ja.de, hsou-da-le:, thi. lou-de.

ビルマ語をどのように学んでいるか、どのように勉強しているかということも知りたい
hsan-da. pyin: pya.mi.ba-de (B4)

気持がつよい

qanya si'si'hma man:dalei: myou. tawai'kou-dha htin nei-ja.ba-dhi (B1)

上ビルマ←本当のは マンダレイ市 一帯 だけと思っている

myan-ma zaga:dwin dhabye'thi: tahkain-hu.dha hko-wo thoun:swe:ja.ba-dhi (B2)

ビルマ語では ブドウ 一房 とのち 呼称し 使用する

pyo:zaga:hma {tou.}, {mya:} qasa: {twei}gou thoun:ja.ba-de (B4)

口語では -tou., -mya: の代わりに-twei を 用いる

kou hla.wei hsou-da, bama pyi yau'hpu:dhala:lou.le:, mei:ja.ba-de (B4)

コウ・ラウエイというのはビルマ国へ 来たことがあるのか とも 尋ねた

この場合も(1)の場合と同様「共同」「相互」の概念を表わすことがある。これについてはあとでまとめて別に述べる。

(2)のもうひとつの場合、動詞に複数助詞がつかない場合をみると、実は、複数の主体を予想しうるVだけの文は、明確な状況におけるものとしては、ひとつもみつからなかった。これは、主体を表示せず状況あるいは文脈に委ねた以上、複数性を明示するには動詞の複数助詞によらざるをえないからであろう。つまり、これさえも文脈に委ねることは、複数性を明示したいという気持ちを半ば放棄することになるからである。⁵¹⁾

6. さきにすこしふれたように、動詞の複数助詞には「共同」とか「相互」の概念を表わす機能がある。これも広い意味での複数概念といえる。⁵²⁾

thu-ne.go: be-doun:ga. thi.ja.dhadoun: (A1)

かれとは い つ 知り あったのか

maca-mi qahcein-hnai' qein-dha: taqu: hpyi' la-myi. sein.dhi kou thin:hlain-qi. mi.ba.

や が て 家族の一員 となる セインは コウ・ティンラインの 両親

51) Cornyn, *Beginning*. p. 282.

sa:de refers to one or to more than one person. 参照。

52) Stewart および Allott がこの点について次のように述べている。

-ca. ... sometimes indicates reciprocal action. *yai'ca.dhi*, they struck each other. (Stewart, *Introduction*. p. 47.); In cases where the verb requires it -ca. may have to be translated into English as 'each other', e.g. *yai'ca.de* '(They) beat each other'. (Allott, *loc. cit.*)

これは、やはり-ca. が severality (§III-2. 後段参照)の意味をもっていることに由来すると考えられる。したがって-koun にはこの用法はない。

hnapa:ne. qatu, cwa. yau' la-ja.dhi. qe. parei'tha'mya:gou hkayi: qu: cou: pyu.zu.
 2人 といっしょに, 来 客 を 出迎えて もてなして
 nei-ja.lei-dhi (A1)
 いた

htou-zin-ga. taqu:gou taqu: pyi'pyi' hka-ga pyo:ge.ja.dhi-mya:gou yahku. qahka pyan-le
 当 時 お互いに ひどく 言いあったこと を 今 再び
 sin:za:lai'pa-ga. hma'mi.nain-zaya mahyi.bei (A1)

考える と 思い出せる ことは(neg.)何もない
 mi'sata Ōno gou-li: myan-ma pyi yau'hlin twei.ja.ba-lein.myi (B1)
 大野氏 にも, ビルマ 国へ 着いたら 会える だろう

「共同」「相互」を表わす文においても、必ず複数助詞を用いるとは限らない。

myan-ma qamyau:dhami:dwei-ne. sa mayei:bu:la: (C1)
 ビルマの 女 性 たち と手紙を(neg.)やりとりしないか

cun-do. thange-jin: tayau' thu-ne. thi.ba-de (C2)
 わたしの 友だち ひとり は かれと 知りあいである

cun-do-ne. hkamya:ne. twei.ba-de (C2)
 わたし と あなた と が 会った

7. 以上動詞の複数助詞について述べてきたが、全体としてこの複数助詞はどういう機能をもっているかについて最後にまとめてみる。

前述の Judson, Cornyn, Allott の説明(いずれも §III-2 参照)は、この複数助詞の機能の本質を的確に述べたものである。Lonsdale も、ほぼ同じことをさらに多くのことばを費やして説明している。それでいて、この複数助詞の本質を説明しつくせていないのは、彼が常に印欧語にする姿勢でビルマ語に臨んでいるからである。つまり彼は、この複数助詞を説明するのに、ビルマ語の動詞に単数形・複数形の区別が厳格に存在するかのようになり、常に単数・複数の対立に基礎を置いているのである。ビルマ語において、N+V(pl.)はないし、Vだけの場合は明確な複数の主体を想定させる用例はみつからなかった。しかし印欧語におけるように、常に主体の複数に呼応して動詞の複数助詞が用いられるというのではないこともみてきた。ビルマ語の動詞は、印欧語におけるような方法で、その数を決定することはできないという Allott の説明⁵³⁾は正しい。

結局、動詞の複数助詞の機能は、動作の主体や動詞のおおのの属性には直接の関連をもたず、もっぱら、動作の主体が複数であるということを特につよく明確に述べたいという意識や気持を表わすところにある。このことは次の用例において、複数性を表わす表現がいくつか重なりあって出てくるのに、さらに複数助詞 -ca. を用いていることから明らかである。

53) Allott, *loc. cit.*

thu-dou. hnaqu:dhi kou thin:hlain-qi. mo-to-ka: ya' hta:dhi. nei-ya qahti. hyau'
かれら 2人 は コウ・ティンラインの 自動車 の 止まっている 所 まで 歩いて
la-ja.pi:hma. ka:gou maun:pi: sein. nei htain-ya lan: thoun:ze-dhou. la-ge.ja.lei-dhi (A1)
きて、それから自動車を 運転して セインの 住んでいる 三十番街 へ 来た

lu-nge lei:qu:dhi tayau'kou tayau' pyoun:ywei. hnou' hse'ca.lei-dhi (A1)
若者 4人 は お互いに にとりこして 挨拶 した

qi-hmya.bin thu-dou. hnaqu:dhi wa-dhana-jin: matu-ja.dho-li: taqu:gou taqu:mu qathe:
これほどまで かれら 2人 は 趣味がお互いに(neg.) 同じでないのに お互いに 心
nin.qaun hci'mi.ge.ja.lei-bi (A1)
深く 愛するようになった

動詞につくこの種の複数助詞の機能は、ビルマ語の構造を特徴づけるもののひとつである。同じような機能をもつ形式として、他にビルマ・ロロ語群のラフ・シ (Lahu-shi) 語の -tshe がある。⁵⁴⁾

お わ り に

ビルマ語における数の文法範疇はどういう形で存在するのかを、名詞と動詞におのこの接続する複数助詞の機能を中心にみてきた。

人称代名詞を除いては、名詞の場合も動詞の場合も複数助詞の使用は随意的 (optional) である。したがって、複数助詞が接続すれば複数、接続しなければ単数というように名詞や動詞を数に関して枠づけるのは適切でない。ビルマ語では、人称代名詞が単数・複数の区別を厳格に守っているのをのぞけば、名詞も動詞も複数助詞の接続は義務的 (obligatory) でなく随意的 (optional) である。つまり、人称代名詞に関する限り単数・複数という厳しい数の文法範疇ができあがっているが、普通名詞や動詞に関してはそうではないということである。したがって種々の複数助詞は、単に複数を明示する文法機能を担う形式として記述されれば十分である。また、動詞の複数助詞 -ca. のような機能をもった形式はまだ他の言語にも見いだされるかもしれない。さらに検討する価値のある問題と思われる。

ビルマ語の数についての的確な扱いをしている文法家は、第Ⅰ章で述べたように品詞の分類についても的確である。ひとつの言語の文法を書くにあたっては、その言語の構造を詳らかに観察し分析した上で、必要と思われる文法範疇を設定することが大切である。

本稿⁵⁵⁾をまとめるにあたって、京都大学言語学教室の泉井久之助・教授（当時）および西田龍雄助教授から適切な御教示をいただいた。また、大阪外国語大学の原田正春助教授およびビ

54) 西田龍雄「ラフ・シ語の研究—タイ国チェンライ県におけるラフ・シ族の言葉の予備報告」『東南アジア研究』7巻1号, 1969, pp. 33-34.

55) 本稿中にあげたビルマ語学者の氏名にはすべて敬称を省略させていただいた。

ルマの友人たちからは、ビルマ語の実際的な運用面について、いろいろお教えいただいた。ここに記して感謝したい。

*

*

*

この論文は、1969年1月京都大学に提出した修士論文を一部書きなおしたものである。加筆するにあたって、京都大学の西田龍雄助教授から適切な御指導をいただいたことを付記して感謝する。

なお、最近 Okell, J. *A Reference Grammar of Colloquial Burmese*. 2vols. Oxford U. P., 1969. が出た。文法記述とくに品詞分類の基本的態度は、大綱に関する限り § I-4 で述べた Stewart, Cornyn, Minn Latt と同じである。 (1969年9月稿)

((付記)) 第 I 章でふれた日本のビルマ語学者の著作については、拙稿「日本におけるビルマ語研究について」(『アジア・アフリカ言語文化研究』3, 1970.⁵⁶⁾近刊)に詳しく述べてある。

56) *Journal of Asian and African Studies* 3, 1970. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo Gaikokugo Daigaku.